

# 障害のある青年のレジャースキル獲得活動の事業化

体育系 准教授 澤江幸則(臨床発達心理士)

障害者にとって、運動や余暇活動と健常者との交流の機会が青年期以降も継続することは、社会参加の手段として有効で、これは本人のみならず地域社会にも有益である。レジャースキル獲得を支援する活動を持続的な事業とすることを目指している。

## はじめに

つくばユースMDCでは、**発達障害のある青年**を対象に余暇活動支援を行っている。そこでは主に身体的余暇活動として、レジャースキルの獲得に向けた支援を行っている。しかし単なるレジャースキルのための支援ではなく、最終的には、地域のなかに、発達障害のある青年が包含されること (**Community Inclusion**) を目標としている。

そこで本報告では、これまで実践してきた取り組みのうち、効果的であると考えられた**3ステップ体験アプローチ法**について紹介し、その可能性と課題を明確にしていく。

## 対象

- 主に特別支援学校卒業した発達障害のある青年
- 毎年、10名を定員に、つくばMDCの関係活動参加者を中心に募集をし、広く広報をしていない。
- 会員数：7名（2017・6年:9名,2015年:4名,1名:2014年）
- 性別：男性7名（過去に女性1名参加あり）
- 年齢：18～28歳
- 障害種：全員、知的障害と自閉症の診断あり

## 3ステップ・スキル体験アプローチ法

これまでの実績から、最終的に一般的な環境で、スキルを発揮するために、自閉症の特性から**構造化**の考えを取り入れ、**手かかり**をもとにした行動形成を、**課題指向型介入法**で実施した。具体的には、原則、以下の3つのステップを踏むようにした。

- 1st step：構造化された環境でスキル学習を行う。
- 2nd step：実際のフィールドを構造化して体験する。
- 3rd step：実際のフィールドで一般の状況下で体験する。

## 実施による変化

- **18歳以降でも新規レジャースキルを獲得できた**  
例、卓球、サーフィン、SUP、スキー、スケートなど
- **地域資源でスキルを発揮できた**  
例、温泉施設で卓球、家族でスケートなど
- **地域で活動するための知り合いが増えた**  
例、地域資源を活用することで、個々の参加者を知っているレジャー施設のスタッフが増えた。

つくばユースMDCとは、

筑波大学アダプテッド体育・スポーツ学研究室が主催している活動グループ「つくばMDC」のなか、2014年から開始した、18歳以降の発達障害のある青年を対象にレジャー支援活動を行っているグループのことである。

**発達障害のある青年を対象にした理由**

・運動機会や余暇支援は、18歳までは保障されているが、18歳以降になると激減する。

**Community Inclusion**を目標にした理由

・学校教育期までに十分な健常者/障害者との交流がないなか、18歳以降で地域福祉の主体的行動を求められているという現状を踏まえた。

## 3ステップ・スキル体験アプローチ法 サーフィン（波ですべるを目標）を例に

1st ステップ: 構造化された環境でスキル学習を行う。

教室内にカラーボールを敷き詰め、そのうえをボードに乗って滑らせた。またはキャスターボードを付けたボードで滑らせた。



2nd ステップ: 実際のフィールドを構造化して体験する。

遠浅で、初心者向けの波が押し寄せる海岸をロケハンして使用した。また人が少ないシーズン前に実施した。



3rd ステップ: 一般の状況下で体験する。

サーフィンをしている人や海水浴を楽しんでいる人たちが多いシーズン中で、サーフィン体験を実施した。



## Difference

- このアプローチ法を使えば、スキルを獲得できるだけでなく、地域資源を活用し、地域の人との交流も期待できる。そのため、それらを想定した新たなステップ（4th step）を検討する（現在、インクルーシブ・スポーツイベントとして実施）。
- 費用面で人件費が大きいため、ほぼ無償で対応してくれた社会人ボランティア（社ボラ）を活用した。今後、社ボラバンクをつくるなどのシステム化をめざす。